

書評

宮野真生子・磯野真穂著

『急に具合が悪くなる』

(晶文社、2019年)

逆巻 しとね

死を掴み私を手放す

——自己（責任）の物語の彼岸——

「私は二人称の哲学をやってない。ずっと一人称だよ」。

2018年9月15日、人類学者・磯野真穂がシンポジストのひとりとして登壇した第11回文芸共和国の会シンポジウム「技術と人間の協働」の対話の時間に、哲学者・宮野真生子が言い放った言葉は忘れられない。「みんな、集会的な組み替えられる存在として人間を捉えているけれど、死んでいくこの身体、この自己はどこにあるのか」。磯野と出会ったときの宮野は、孤独な一人称を生きていた。

本書は、宮野が鬼籍に入るまでのおよそ二か月、宮野と出会いその病と死を踏査する磯野と、これを哲学へと掴み返す宮野とが交わした往復書簡集である。ラルフ・ウォルド・エマソンとトマス・カーライルが大西洋をまたいで交わした書簡と同じような、数か月わたるタイムラグと宛先に届かない可能性を過らす賭けの昂りは、この電子化の時代には存在しえない。それでもなお死と有限な身体を焦点とするこの往復書簡集においては、互いの学術的背景の差異と各々が抱える不安が、別種の距たりとなって先鋭化している。書評子の試みは、距たりゆえに分かち合われる、「死んでいくこの身体、この自己」をめぐる宮野の思索と磯野の物語行為から、もうひとつの一人称の時間性を掴みとるひとつの賭けである。

書簡は、病膏肓に入る宮野が病状の急変に際しイベントに関わっている人たちに迷惑をかけることを心配するところから始まる（16）。のちに磯野がこの件を蒸し返すと（81）、宮野は「客観的にリスクとベネフィットを判断する合理性に則った生き方」（86）をし、「コントロールの欲求」を強く持つ患者としての自覚を語る。だが、同時に宮野は

そのようなコントロールを放棄する非患者でもある。事実、宮野は具合が悪いにもかかわらず上述のシンポに出かけ磯野と出会う。「合理性を手放すことのスリルといま一瞬の自分の気持ちだけを生きる単純さ、全部壊してしまえというゾクゾクする衝動」（89）。型に嵌めたいと同時に型を壊したいという宮野の内なる相克は、なるほど九鬼哲学を専門とする一人称の哲学研究者の軌跡を思わせる。

宮野の思索に応じる磯野は、（型破りな宮野ではなく）コントロールの欲求の強い患者としての宮野に運命論と確率論というふたつの物語を示す（37）。前者は「治る／治らない」の両極を患者に与え患者の現在の可能性を未来の一点に収斂させる。このときの患者は100%患者として生きなければならない。後者の患者は「よくなるかもしれない／よくならないかもしれない」という不確定性のなかに置かれる。この確率論に照らせば、自らの病をコントロールする宮野は、未来を不確定にしたまま、非患者の現在を生き、同時に患者としての制約を破る「ゾクゾクする衝動」に身を委ねることが可能になる。磯野は宮野の特殊個別な苦しみを、運命論と確率論（弱い運命論）という「類型のあいだの揺れ」として共に考える。自らの可能性をすべてもう治らない末期がん患者という未来像に集約してしまえば弱くなれる。選択や決断に悩まずに済むし、楽になれる。しかし死という未来の一点にひた走る現在の生はやせ細る。だから「そんなもん知らんがな」（115）と運命論を振り払い、不確定性のなかで計算し、自らの生の幅をとり続ける強さを宮野は保持する。型の生成／型破りを繰り返す哲学的動性は、死を身近に感じるにつれ運命論に揺すられながらも、確率論のなかで絶えず患者への収斂を拒否する自己管理の強さとして宮野自身に生きられている。

当然、型と型破りのあいだの動性と、物語類型のあいだの揺れは異なる。宮野の主眼は、運命論と確率論のどちらを選ぶかではなく、個人の生が物語類型を更新していくその動性の別袂に置かれている。確率論は宮野のゴールではない。確率論という型を壊し新たな型を生成させるその動因を探ること。それこそが宮野の哲学研究者としての本領である。

もっともこの時点での宮野の叙述に九鬼哲学を超える要素は見いだせない。九鬼を超える、私の死の哲学に向かう契機となるのは、宮野と磯野のすれ違いが「出会う」ときである。たとえば、本書第6便での、書簡という形式には話題の転換や自由度、動性が欠落している、という磯野の指摘は、宮野を死と病の思索へと向かわせる。宮野は、書き言葉や死や病を語るという性質が、自分を患者として固定化し、筆致から展性を失わせる、という自己省察を展開する。しかしその欠点は、転じて福をなす。チャットのような劇的な変転ではなく、書簡特有の「ぬるっとしていて気づいたら変わっているような」偶然性の新しい側面を宮野は認めるのである（140）。

こうして「急に具合が悪くなる」という死と病に特有の現象に際し、未来への強い企投を要求する九鬼哲学固有の、刹那的な切斷や毅然とした決斷から宮野は遠ざかることになる。未来を死へと縛りつける運命論的な弱さも退ける。そして非患者になれる余裕をひねり出す、自己管理に長けた確率論の主体からも脱皮する。「ぬるっとしていて気づいたら変わっているような」時間性から、（死に向かうのではなく）死と共にある実存のための哲学をひねり出すこと。これが九鬼の偶然性の哲学を下敷きとしながらも、自らのひとつしかない身体の欠落感や痛みと共に宮野哲学が生成していく契機である。

宮野哲学の雛型は、第7便における、磯野による「死という未来」の共有の求めを、宮野が「今ここにやってくるもの」として死を語り直す場面に求めることができるだろう。すなわち、この有限な自己の死を未来に置く物語を宮野は拒否する。「今ここにやってくる」この私の死と共にある宮野が引き出すのは、コントロールと企投の否定である。宮野は自らの仕事を未完成のまま無責任に手放すことを肯定する。この無責任は、死する運命論に身を委ねる態度とも、生きている限りこの世界に無根拠のまま投じられているこの私という実存の被投性に発する九鬼哲学の企投とも決定的に異なる。この他でもない死とともにある無責任は、私ではない存在のいる「わからないはずの未来に対してあらかじめ決定的な態度をと

る」信頼や約束という和辻的な倫理実践として語られるからだ（162）。

「最後に残った未完結な私の生を誰かが引き継いでくれれば嬉しいと思うから」（165）という宮野の言葉は、すべてを投げ出して楽になりたいという運命論への屈従に発するものではない。信頼や約束という不確かなものに賭ける強靱さに支えられた無責任は、不確定な何かを未だ来たらぬ無際限の誰かに（決然と企投することなく）ぬるっとして手放す。これは自己変容を中心化する偶然の哲学とは無関係である。なぜなら今、死を掴んでいる宮野がこの仕事を手放し、誰かがそれを引き継ぐ偶然に賭けても、起点となる私は変容を経験する前に消滅するだろうから。むしろ、この死と共にある哲学は、自己変容以前の出会いを焦点化する。出会いは、自己に発する信頼や約束を掴みとってくれるかもしれない未だ来たらぬ他者に自己が予め巻きこまれている次元であり、さしあたりその獲物は、宮野と共に思索を進める書簡のなかの磯野に他ならない。死を掴んだ宮野は私を手放す。過去や現在と線的に結びつけられた死すべき「自分」としての未来から、何度もめぐり会う不特定多数の私たちの時間へ（199）。「不安定さのなかで自分の抱えた違和感の正体は何だろうと考えるきっかけを求めた人々」（195）が凝集する彼岸へ。「そう、私たち」（233）へ。

宮野の信頼の宛先となる磯野もまた、私個人の運命論や確率論の物語から逸れ、患者に対する定型的な接し方を越えた私たちの物語行為にこだわるようになる。ティム・インゴルド『ラインズ』のアイデアを応用した、「運動の中でラインを描き続けながら、共に世界を通り抜け、その動きの中で、互いにとって心地よい言葉や身振りを見つけ出し、それを踏み跡として、次の一步を踏み出していく」物語行為である（188）。他者と共に行われる「私たちの」物語行為は、医師や患者が選ぶ物語類型ではなく、点描どうしを義理堅く結んで忙しく屈折していく物語の硬直でもなく、おそらく私たちの行為の過程で「ぬるっとしていて気づいたら変わっているような」自己変容を伴う物語行為であるに違いない。物語行為はそれ自体、目的を持たない。このどこに向かうかわからない

物語行為は、その過程で他者を際限なく巻きこみ、自己責任を手放す私たちの物語をつくるだろう。磯野は、異なる物語のあいだの揺れではなく、物語行為に伴う変容と（責任responsibilityではなく）私たちの応答(response)の倫理へと踏み出していく。

9便、10便において、磯野の触発に応える宮野は、7便で展開された「今ここにやってくる」死と共にある無責任と信頼の哲学を、ぬるっとした「時間の厚み」の哲学として深化させる。「自己と他者が出会い、その出会いから、それぞれが自らの物語をどう立ち上げていくか、そこからどんなふうに各自がラインを引いてゆくのか、それこそが大事であり、その立ち上がりが見たいのだと強く願っています」(220—21)。宮野の関心は、過去から現在、そして未来へ向かって継起的に流れる自己の物語的時間にはない。宮野が「時間の厚み」と呼ぶものは、「各自」の物語行為に類型にはまらない動性を与える、ぬるっとした「立ち上がり」、「新しい始まり」(224)である。

「立ち上がり」が存在するのは、誰かとの物語行為のなかではなく、物語行為の動性それ自体を起動させる数多の出会いである。出会いとその引き受けによる、能動でも受動でもない、私のものでもあなたのものでない、ただ不特定多数の私たちのものと示唆する他ない、無数の「新しい始まり」の密生こそが、物語以前の未だ来たらぬ時間に存在し、物語行為を稼働させる。この出会いが起こる前には、ラインを引く私もあなたも存在しない。そしてラインを引いている最中も、私は私たちの出会いに何度となくその場を譲り、その場に突き動かされることによって、ラインと私を変容させる。死と共にある哲学が提示する時間の厚みとは、私では生きることのできない私たちの「魂の分け合い」(225)の場である。ただし、魂の分け合いという私たちの（物語ではなく）時間を生きるためには、7便での洞察を引き継ぎ、私は私を無責任に手放し、私たちを信頼しなければならない。

物語には生まれて生きて死んでいく私やあなたがいる。物語は不可逆的に流れる。しかしその物語の任意の時点の根源には、物語的時間には収まらない「新しい始まり」がある。新しい始まりは、

終わりを含み持つ物語の始まりとはその根柢において折り合わない。新しい始まりは物語の動性そのものを生み出す、私ひとりでは不可能な出会いである。たとえばひと連なりの物語を生きているあいだにも、私は何度となく私を手放し（死に）、始まり直している。その終わりになき始まりを生み出すものこそ、「私たちの出会い」である。このように「今ここにやってくるもの」として死を掴み返す宮野哲学の本領は、未来において死ぬ私を物語化することから絶縁している。私ひとりでは出会うことはできない。私たちでなければ出会えない。私は私たちの時空で死に続け、私は絶えず新たに立ち上がり続ける。こうして私たちが密生する時間の厚みの上に立つ私の物語は、特異なラインを蠢かせることができるだろう。重ねて強調しておくなら、私たちには未来も過去もない。私たちには「時間が生まれてくるのを感じとって、私たちが引っ張り出してきた」新しい始まり、絶えずめぐり会う厚い時間だけがある(233)。

10便の掉尾で宮野はこう呼びかける。「磯野真穂さん、あなたが語る物語は、決してあなただけのものではない」(235)。この呼びかけは幾重にも併する。磯野が語る物語は医療の現場にいる専門家や患者のものでもある。磯野の物語は「あなただけのものではない」。その通りだろう。だが宮野の言葉はその根源でも響く。磯野が語るどの物語の根源でも、宮野哲学の「私たち」がめぐり会っている。磯野の物語は「あなただけのものではない」。

伴走する磯野の楫と共に宮野の生が死へと流れていくライフストーリーとして本書を読むのもいいだろう。ただし宮野のライフを突き動かしていたのは、その根源にある、誰にも占有できない私たちが出会う時間の厚みである。「リスクとリターンの打ち返し」(199)に拘泥する私を手放し、密生する私たちが出会い直す限り、どの物語も根源的には決して「あなただけのものではない」。哲学は「あなただけのものではない」。「未来へと消えていくもの」(199)としての私の時間ではなく、「多くの点たちがラインを引こうと苦闘している」(200)私たちの始まりの時間のなかで、賑々しい一人称の哲学者は今もめぐり会っている。